

『安達原秋二色樹』翻刻（上）

要 旨

本稿は、文政三年（一八二〇）刊の馬琴合巻『安達原秋二色樹』を翻刻紹介するものである。

本作は、浄瑠璃『奥州安達原』（近松半二ほか、宝暦十二年「一七六二九月初演」）に依拠しており、登場人物・時代設定・趣向などの点において、共通する部分が多く見られる。なかでも、四段目切に相当する「一つ家」を取り入れた場面においては、髑髏に血を注いで親子関係を判断する「血合わせ」と、親の異なる二子を幼時に交換する「取り替え子」を用いて血筋の正統性を判別している。「血合わせ」は『南総里見八犬伝』第六輯における犬村大角の逸話にも用いられており、馬琴の好んだ趣向であった。詳細は、拙稿「読本・合巻における趣向の往還―「血合わせ」を手がかりに―」（『馬琴読本の様式』清文堂出版、二〇一五年）を参照されたい。

キーワード… 曲亭馬琴 合巻 演劇 血合わせ 一つ家

紙幅の都合上、今回は書誌および前編の翻刻のみを記すこととする。なお、凡例は本紀要の第四十五号掲載の拙稿「曲亭馬琴『縁結文定紋』―解題と翻刻―（上）」を参照のこと。

一 書誌

底本 東京都立中央図書館加賀文庫蔵本（89-1）。本文は国立国会図書館蔵本・早稲田大学図書館蔵本・専修大学図書館向井信夫文庫蔵本によって校合した。破れ・汚れの目立つ部分については、早稲田大学図書館蔵本（〈13-02483-0012〉〈13-02378-0075〉）で補い、その旨を図版の下に記した。

刊年 文政三年（一八二〇）。

画工 歌川豊国。

筆工 藍庭晋米。

版元 山本平吉（栄久堂）。

形態 中本。六卷三十二冊。

寸法 一七・五×二二・九糎（表紙）、一四・八×一〇・七糎（匣郭）。

* 中 尾 和 昇

表紙 花浅黄葱色地、卍繋ぎ文様（空押、後補表紙）。左肩に無
 辺題簽「陸奥外浜浜鶴党安方 前編（後編）」（鳥の子色地、
 直書）を貼付。
 後表紙 表紙と同じ。
 柱刻 「安達 壺（三十）」。
 その他 底本は原題簽欠。



写真1 前編・原表紙
 （早大本）

二 翻刻

〔見返し〕（振り仮名は原本のまま）

〔曲〕 曲亭馬琴作

〔歌〕 歌豊国画

安達原秋二色樹

ひらかなさい字綉像魁本 江戸おやぢ橋 山本新版

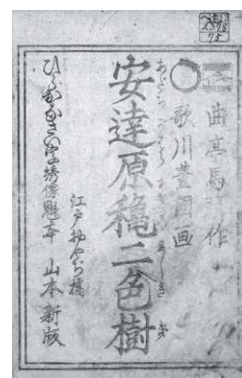


写真2 前編・見返し
 （早大本）

〔一オ〕（振り仮名・句読点は原本のまま）
 陸奥外 浜水禽善知鳥之図
 かたちは小鴨の大サにして。総身はほと鳴のごとく。うす墨色にして。
 しろき斑あり。背はふとくして。前尖り。横に〵〵かくのごとく。おち
 いらたるところありて筋のごとく。凸凹なり。背よりつゞきて。目の
 下肉つきの所。高くさし出たるが。その色。本はうすあかく。末は黄
 にくろみを帯たり。目の下にしろき毛ながく垂て。髯のごとし。足に
 水かきありて。腹はすこし白し。水鳥の足は。大かた後へつくものな
 れども。わきてこの鳥はその足尻にあり。彼地の方言に。出崎をうと
 ふといふ。この鳥の背は。上のかた高く起りて出崎の如し。よりにそ
 の名に負したり。又一説に。うとうは鶴党なり。この鳥は。よく魚を
 とりてくらふこと鶴のごとし。よりに。鶴党と名づくといふ。いまだ
 いづれか是なるをしらす。

文政三庚辰年春正月新版 馬琴識 〔曲〕 〔壺〕



写真4 1ウ・2オ

「1ウ2オ」（振り仮名は原本のまま）
 千代戸姫 新羅三郎義光 蛭巻鉦蔵 鶴党二郎安方
 おもふ事あり明かたの笛の音をおのが友とや鹿のなくらむ
 おもひかねてながむるそらになく鶴の齢しあらばまたもたのまん



写真3 1オ（早大本）

「3ウ4オ」（振り仮名は原本のまま）
 外の浜善知鳥の精霊 獵師南兵衛 外の浜善知鳥の精霊
 人けなき外の浜辺によぶこ鳥あなおほつかなうとふやすかた



写真5 2ウ・3オ

「2ウ3オ」（振り仮名は原本のまま）
 安達原黒塚の鬼刀自 鎌倉権五郎景政 藤太郎包季
 みちのくのあだちの原のくろ塚に鬼こもれりといふはまこと敷
 にしき木はたちながらこそそくちにけりけふの細布むねあはすして

「4ウ5オ」

奥州九ヶ年の戦ひに勝負まち／＼なりけるも、頼義・義家の武勇によつて、奥六郡に威を振るひし安部の貞任ら凶徒残りなく滅亡せしかば、將軍頼義朝臣は正四位の伊予の守に拝任せられて、都に上り給ひ、嫡子義家朝臣はなほも国府に留まりて、貞任が残党をより／＼詮索し給へば、奥州ます／＼治まりけり。時に康平六年春の頃、義家の近臣藤太郎包季、主君の代参として塩竈明神へ参詣し、主君より寄せ参らせられし錦木の名香を燻らせつゝ、しばらく祈念する程に、二八ばかりなる乙女のいと艶やかなるが、若き女子を供に連れ、これも明神へ参りしが、包季が男ふりのよに優れたるに心ありてや、いと面映ゆげにも言ひかけたるも憎からねど、包季は主君の代参たる神詣での折なれば、よき程に挨拶してすでに下向に赴きしに、石の鳥居のほとりにして、回国の行者の憩ひあるを見るに、去年貞任滅びし時、乱軍の中を切り抜けて行方知らざる宗任が人相書によく似たれば、包季はやく供人らに目配せして搦めとらんとする程に、かの修行者は心得たりと身をかはし、仕込杖を引抜きて、先へ進みし一人を水もたまらず首打落とし、なほ東西に切つて回れば、瞬く隙に供人らは枕を並べて打たれけり。

次へつゞく

へ八幡太郎義家の近臣藤太郎包季、塩竈の社頭にて曲者を搦めとらんとす。
 へ安部の貞任の弟宗任、回国の修行者に身をやつし、父兄の仇敵頼義・義家を討ち取らんとて、陸奥を徘徊し、包季に見咎め

られ、又切り抜けてその場を逃るゝ。

へなによウ小癪な。

○狂言半ばながらちよつと御披露仕る。京橋常盤町かめや喜兵衛方の桜漬、御酒の口取に妙なり。その外効能多し。上戸方は尤賞翫すべきもの也。求めて試み給へかし。

「5ウ」

つゞき包季すかさず「とつた」と声かけ、組まんとするを振り払ひ、あとをくらし馳せ去るを、なほ逃さじと追つかけたり。さる程に、かの女子兩人は遅れて下向に赴きしが、此有様に驚き恐れて、出も得



写真6 3ウ・4オ

やらず窺ひみたるに、曲者ははや逃げ失せて、かの侍もあとを慕ふて、
 浜辺の方へ馳せ去りつ。この隙にとて、忙はしく立帰らんとする程に、
 乙女は思はず、包季がとり落としたりしたる香包を拾ひ取りて嬉しげに見れ
 ば、錦木と銘を打つたり。「確かに主の」と懐へ入る、間もなく」と
 く／＼と、供の女子に急がされ、家路をさして帰りけり。
 へ思ひがけない危ふい事、サアこの隙にお発ち遊ばせ。
 へ確かに主の香包。通ふ心のまこととて、銘も嬉しき錦木を、取り
 上げてなほ物思ひ。辛気な事ではあるはいなア。

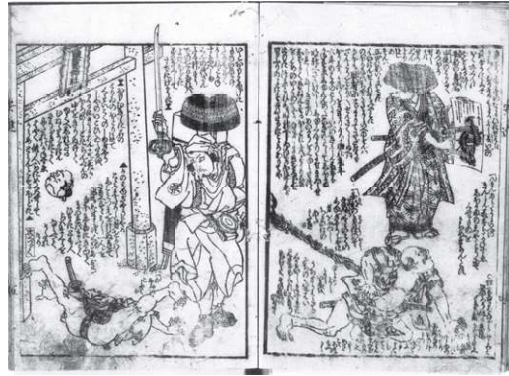


写真7 4ウ・5オ

〔6オ〕
 藤太郎包季は、塩竈の社頭にて曲者を追ひ失ひ、あまつさへ主君義家
 朝臣より預かり奉りし錦木の名香を失ひしかば、遺恨やる方なけれど
 も、さてあるべきにあらざれば、立ち帰りて事の由を申けるに、義家
 大きに怒らせ給ひて、「やをれ包季、汝は五三人の供人とを召し連れ
 ながら、只一人の曲者を捕へ得ず、あまつさへ錦木の名香を失ひし事、
 言語道断の落度なり。かの名香は、わが祖父頼信朝臣相模の守たりし
 時、朝敵平忠常を討ち滅ぼせし功により、御感の余り帝より下し給
 はりたる物にして、父頼義に相伝せられ、又義家に譲り与へたるかの
 名香の奇特といつば、もしこれを燻らせは妖怪変化は形をあらはし、
 又妖術・邪法をもてその影を隠すものも、件の香の香りを聞けば、逃
 れ隠る、に由なし。かゝる希代の名香なれども、心願のあるによりて、
 しばらく汝に預け遣はしたりけるに、曲者を追はんとてとり落とせし
 なんととは粗忽の至り。言ひ訳立たんや。詰腹切らすべき奴なれども、

つゞく



写真8 5ウ

義へ粗忽の条々言ひ訊問かぬぞ。勘当じや、立つて失せう。まだうぢくくと不届者めか。

藤へ申訳なき此身の落度。一つの功を立て、後、末遙かなる帰参の願ひ。畏れながらご機嫌よう。もしも武運に尽き果てなば、是尊顔の見納めと、覚悟極めし一世の浮沈。

〔6ウ7オ〕

まへのつゞきいざ、か思ふ由あれば、一命は助け得さする。すみやかに退散して名香を尋ね出し、宗任が首もろともに携へ歸りて罪を贖へ。これらの事得遂げずは、いつまでも帰参は叶はず。勘当ぞ、とくく立て、とく立たずや」と激しき怒りに包季ははつとばかり、返す言葉もなまよみの甲斐なき我が身の誤りに、すこく御前を手束り、館をそのま、退けば、我が宿所へも憚りの関の戸ざしを据ゑられて、行方定めず出去りけり。○しかるに、此頃義家朝臣いさ、か恙あらせられしに、日を追つて重らせ給ひ、医療の験もあらざりければ、郎党平太夫国たへらよりく、に評義を凝らし、陰陽師に占はせけるに、「これまつたく、九ヶ年の合戦に命を落としたる貞任らが怨霊の祟りなり」と申すにぞ。「さらば怨霊得脱のため、放生会あるべし」とて、後園に飼はれたるあまたの鶴はさらなり、なほ又国中より数百羽の鶴を取り寄せ、「源義家これを放つ」と彫りつけたる黄金の札をことごとくその脚に付けさせ、一羽も留めず放させ給ふ。次へ

光へ雲井遙かにゆく鶴の、声もろともに君万歳 希代の功德めでた

い。

国へ己が齡を我が君に捧げて還る汀の鶴、数も千秋千羽の放生、恐悦至極に存じ奉ります。

安針丁の鷲と違つて、鶴は又格別だ。アレ豪勢に伸すはく。

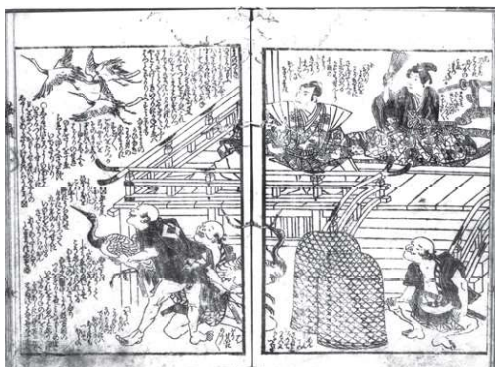


写真 10 6ウ・7オ



写真 9 6オ

「7ウ8オ」

つゞき 時に義家の御舎弟森羅三郎義光、年なほ二八の童形なれども、心賢しく武勇に長けて、しかも兄義家朝臣に仕へ給ふ事等閑ならず。よろづ孝悌なりければ、老党国たへと心を合はせて此放生会を申進め、かくとり計らひ給ひけり。されば数百羽の鶴、列を乱さず雲井遙かに飛び行く有様。空中に白布を引渡せしに異ならず。又かの黄金の札は日に映じてひらくと閃く有様、たゞこれ弥陀の影向に花降り、音楽聞こゆるごとく、鳴き連れ立つ鶴の声々いとも遙かに聞こえけり。かくまでまれなる功德には、いかなる怨靈悪神も障礙をなさじとぞ、人々感じ合へりける。されば又、朝敵貞任が残党余類、或ひは討たれ或ひは降参して、國中静謐したれども、貞任が弟宗任のみ、厨川の柵より逐電して、今にそのありか知れず。これにより、鎌倉の権五郎景政、主君の厳命をうけ給はり、國中を巡歴して、もつばら宗任がありかを詮索す。これのみならず、外の浜の漁師南兵衛といふ者を召し寄せて、景政みづから対面し、「汝らもかねて知りつらん、將軍義家朝臣御悩おはしませしに、放生会の功德によつていさ、か快氣し給へども、いまだ御床上げに至らず。しかるに、外の浜に善知鳥といふ鳥あり、その善知鳥の雌雄二羽の血潮をもつて薬に調合し、これを進め奉らば、日ならず全快し給ふべしと、ある医師は申すなり。しかれども、かのと鳥はつねに人里遠き浜辺にをれば、容易く捕へがたしと聞く。もしその方が才覚をもつて善知鳥を捕へ奉らば、褒美は望みにまかされん。もし生け捕ること叶はずは、よしやうち殺すとも、その血

潮だに搾り取らば、薬調合に用ひられん。この旨をよく心得よ。又一つには、此度黄金の札を付けて放させ給ひしあまたの鶴を、もし一羽にても捕る者あらば、忽ち首を刎ねられん。もしその鶴を殺して札を取る者あらんには、すみやかに訴え出べし。あまたの褒美を給はらん。

次へ

へこの高札を立ておかは、手柄は仕勝ち、心得たるか。ハテ勇まし

い奴ではある。巨細にきつと申付けたぞ。
へ御褒美をと聞きましてはまんざらでもござりませぬ。働いて見ませうかへ。



写真 11 7ウ・8オ

「8ウ9オ」

つゞきすなはちその事の趣を書き記し、村々に掛くるものなり。第一には宗任を擲め進ずべき事、第二には善知鳥の鳥の事、第三には鶴を殺す者の事なり。此旨よく「心得よ」といと嚴重にぞ言ひ渡す。こゝに又、陸奥けせの里の片ほとりに、とぢめといふ寡婦あり。その素性を尋ぬるに、元は奥州の住人藤原の時貞の後室なり。時貞は当国にて筋目正しき武士なりしが、子供二人ありて、物領を光貞といひ、次は女子にて千代の戸といへり。しかるに先年、安部の貞任猛威を六郡に振るひし折、千代の戸が美人なる由を伝へ聞きて、ひたすら婚縁を求めけれども、彼が暴悪を憎みて承け引かず。貞任深く恨みを含みて、ある夜鎮守府なる時貞が宿所へ押し寄せ、短兵急に攻めしかば、時貞は不意を打たれて防ぐこと叶はず、その子光貞とともに乱軍の中に討たれり。かゝる乱れに、逃れがたき時貞が妻とぢめ、娘千代の戸は、すでに虜になるべかりしを、家子に善知鳥二郎安方といふ者、その妻うきねとともに主君の妻と息女を救ひ出し、此けせの里に逃れ来て月日を送る程に、貞任すでに滅びて、私の恨みを清むるに似たれども、時貞・光貞討死して、家を継ぐべき男子なければ、本領安堵の願ひも叶はず、かく侘び住まるをすといへり。かゝりし程に、千代の戸はある日うきねを伴ふて、塩竈の社に参りしに、凶らず藤太郎包季も主君の代参に次へ

ちへ果てしない此病。床髪で我か身が恨めしい。
うへ今日は心持も良いやら、お顔の色も見直しまして、喜ばしう

「ござります。」

と「お志はいかばかり喜ばしうござりますれど、馴染みの薄いこ
なさんのお世話になるも何とやら。」

南へまだ近頃の馴染みでも、袖振り合はした他生の縁。娘御の長の
思ひ、葉の代も続くまい。利安にちつと貸さふかへ。ハテ馬鹿
律儀なわろたちだ。貸さふと言ふに嫌かいの。

安へ兼ねぐ頼みおきました、心当たりも他にござれば、とやらか
うやらまはりませうかへ。

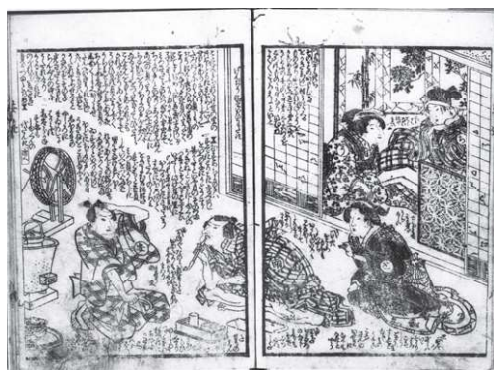


写真 12 8ウ・9オ

「9ウ10オ」

つゞき かの社へ詣でしをよそながらに思ひ初めて、いづくの誰とは知らねども、恋風の身に染みしより、身を戒めても忘れず。折からの騒動に、かの人のとり落とせし錦木とかいふ名香を肌添え身に付けて、またの逢瀬を折りつゝ、人に知らさぬ恋病の、枕もたえて上がらねば、母のとぢめも苦を増して、労はり看病したりける。そが中に、家子善知鳥二郎夫婦は、忠義の志篤き者也ければ、夫婦もろ稼ぎして、年頃主君親子を貢ぎたりけるに、今又千代の戸の病の床にいと、しく心を苦しめ、貧しき暮らしのそが上に、人參の代を才覚し、今日までは薬を進めしが、すでに蓄へも残りなく使ひ果たしてせんすべなし。折から狛師南兵衛は、近頃召しに応じて国府に参りしが、交易のため、又けせの郡に來りて、千代の戸が雅やかなるを伝へ聞き、縁を求めて折々その家に赴き、千代の戸が病み患ふを幸ひに、金を貸さんと云ひけれども、安方は後の祟りを恐れてその金を借らず、薬の代を才覚に、今日しも宿を立出けり。しかるに、その日は雪降りて行来もすでにまれなるに、善知鳥二郎はいまだ帰らず。はや初夜の鐘聞ゆる頃、回国の修行者來て、一夜の宿りを求むるにぞ。この日は時貞・光貞が討死せし命日なれば、とぢめはこれを留めしに、又一人の旅虚無僧、行き暮れて宿を乞ひけり。すでに一人留めながら、後に來つるを留めずは、功德もその甲斐あらじと思ふて、**次へ**

宗へ行き暮らしたる修行者に、一夜の宿を頼み申す。

へ恥づかしながら貧しき暮らし。何はなしとも志す仏事もござれば、

まづくこなたへ。

藤へ此大雪に難義至極。一夜の報謝に預かりたい。

「10ウ」

つゞき これをも内に伴ひて、おのく別座敷に休息させ、とぢめとうきねは代はるぐに柴折り焚きてもてなしけり。○さる程に、先に宿りし修行者は、とぢめが折り焚く柴の火影にて、互ひに顔をうちまもり、「確かにお前は宗任殿」「一言ふそなたは時貞の後家とぢめならずや。こはくいかに」とばかりに呆れて言葉もなかりしが、折節あたりに聞く人なければ、宗任形を改めて、「珍しやとぢめ、我が兄貞任もまそかりし日、汝が娘千代の戸に恋慕して、ひたすら縁談を議せられしに、時貞・光貞愚かにして、その事を承け引かず、つひに自滅をとりたりき。しかれども、これよりして味方に背く者ありて、我が輩の軍威振るはず、つひに厨川の柵を攻め破られ、兄貞任を初めとして、一族郎党枕を並べて悉く討たれし事、時の運とは言ひながら、又一つには時貞が一味せざりしによつて也。今圖らずもこゝに宿りて、汝ら親子にめぐり会ひしは、せめてもの幸ひなり。兄貞任が孝養に、千代の戸が首打つて、かの妄執を晴らせせん。案内せよ」と、仕込杖をはや抜きかけて立上れば、とぢめは騒ぐ気色なく、「逸り給ふな宗任殿。恨みを言へばこちにも山々。時貞が心ありて、かの婚縁を結ばざりし子細をつぶさに物語らん。まづくくしばし」と押し止め、閑談数刻に及びけり。

宗へ千代の戸から先へ討つべきか、まづ汝から討つべきか、この場に及んで卑怯な繰言。逃れぬ所だ覚悟しろ。
 とへ早まり給ふな宗任殿。子細語るも憚りあり。急いてはたためなるまいぞへ。

「11才」

さる程に、藤太郎包季は錦木の名香と安部の宗任が行方を尋ねたため、旅虚無僧に身をやつして国中を徘徊し、ある日、雪のいたく降りたる夕暮に、思はずもとぢめが家に宿を求めて一間の内に休らひしが、奇なるかな、納戸の方に当たりて香の香りの馥郁と薫するにぞ。包季心に思ふやう、「あの香の香りこそ、まさしく日頃我が尋ぬる錦木の名香に疑ひなし。子細あらん」と抜き足して、納戸の内をさし覗けば、いと艶やかなる娘一人、病の床にかかりつ、香を焚きてゐたりける。包季さてはと心に領き、ほとり近く進み入りて、かの娘にうち向かひ、「我は今宵一夜の宿りを求めたる旅人也。御身は此屋の娘なるべし。

次へ

藤へ今日まで知らぬ千代の戸殿、心に立てし錦木の此名香がしるべして、めぐり会ひしも不思議の奇縁。
 ちへそんならこれが宗任の絵姿でござんすかへ。
 とへわらははともあれ娘が事、お頼み申す包季殿。本望とくるも今宵の内。



写真15 11才



写真14 10ウ



写真13 9ウ・10才



「11ウ12オ」

つゞき いかにしてその香を所持し給ひし、いぶかしさよ。子細いかに」と占問へば、娘はいとゞ面映げに包季をうちまもり、「いかに、わらは、此屋の娘千代の戸と呼ばる、者なり。この秋九月十五日、塩竈明神へ参りし折、袖振り合はせし御身ゆゑに、長き病となりはべり。恋しとばかり名も知らず、所も知らで物思ひ、その折御身が落とし給ひし、此錦木の名香を、又会ふまでの形見ぞと、肌身離さず心にも、しめて秘蔵し侍りしが、凶らずも今宵又、こゝに宿りし二人の旅人、物の隙よりふと見れば、その一人こそ日頃より、恋しゆかしき殿御なれ。言ひ寄らんにも我が身こそ、深くも思ひ初めたれど、それとも知らぬその人に、何と夕べの雪明かり、積もる思ひを余所ながら、知らる、由もあらんかとて、臥所に焚きし錦木の、香の煙も闇の戸に、立て、それとは告げ侍り。心尽しを憐れみて、この身の願ひも錦木の、香もろともに取り上げて、叶へてやいの」とかき口説き、かの香包を渡すにぞ。包季取つて押し戴き、「我去ぬる頃、塩竈にてかの名香をとり落とせし、落度によりて今此流浪。不思議に御身に拾はれて、再び我が手に入りし事、いまだ武運に尽きざりし。幸ひこれに増す事なし。しかれども、なほ訝しきは先に此屋に宿りし修行者。物の隙よりつくづく見れば、この秋、塩竈の社頭にて追ひ失ひし曲者なり。しかればこれ、かやつこそ宗任に極まれり。それぞと知りて宿せしか、主の女が氏素性、いかなる人ぞ聞かまほし」とひそめき問へどうちとけぬ、心隔ての唐紙越しに、

つゞきへ

はなしふたつにわかるこゝに又、善知鳥二郎安方は、主君の息女千代の戸の長き病に、人參の代尽きて、忠義のために身を忘れ、行き来絶えたる雪を侵して、弓矢携へ立出て、義家の放し給ひし鶴とも知らで、射て落とせしが、脚に付けたる黄金の札を、掠め取りしぞ無残なる。折から、獵師南兵衛は此所へ来かゝりて、件の様子を窺ひけり。又、安方の妻のうきねは、夫の帰りの遅きを苦にして、雪道を辿り、やう／＼そこに歩み近づき、此体を見てうち驚く。此所、三人立回りあり。無言の拍子幕と見るべし。

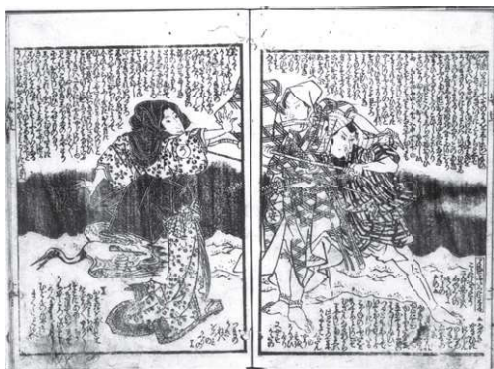


写真 16 11ウ・12オ

「12ウ13オ」

つぎ「その疑ひは理なり。その訳わらはが告げ申さん」と言ひかけて、内に入る者は、これすなはちとぢめなり。包季にうち向かひ、「わらはが夫は、当国の住人藤原の時貞とて、人に知られし武士なりしが、安部の貞任に滅ぼされ、残るは娘と我が身のみ。しかるに今宵図らずも、こゝに宿せし安部の宗任、彼も敵の片割れなれば、せめて一太刀恨みんと、思ふ心を色にも見せず、かやうく謀りて、既に心を許させおきぬ。此錦木の名香ゆゑに、浪々せしとたまふ御身は、世の風聞に伝へ聞く、八幡殿の近臣なりし、藤太郎包季ぬしにこそあらめ。娘千代の戸がゆくりなく、思ひ初めたる恋婚殿。様子はかしこで立ち聞きせり。しかるに今宵、敵宗任図らずこゝに來りしを、疑はれんは本意にあらず。千代の戸が父時貞、兄光貞は去ぬる年、貞任に討たれしかば、その弟たる宗任も、又これ敵の片割れ也。いかで討たんと思ひしかど、女子の身にはそれも叶はず。彼も又、我々をかねて見知りし事なれば、貞任が滅びしは、時貞が千代の戸を与へざりしに起これりとて、却つて恨む美心、かやうく謀りて、討ち取らんと思ひたる、折に幸ひ包季殿。名乗り合ひしは不思議の良縁。娘か望みを叶へ給はゞ、すなはち婿なり姑なり。」

つぎへ

「まことに千秋万歳の、千箱の玉に疵なき夫婦。此やうに喜ばしい目出たい事はないいなア。」

「藤原の時貞の後室とぢめ、安部の宗任を討ち取らため、娘千代の戸を妻合はせんと偽り、婚姻の盃を進むる。詳しき事は此所に

記しがたし。次を読みて知るべし。
ちへ同じ事なら千年も、こゝに逗留遊ばして、心細い我々が、力となつて下さりませへ。
へ大望ある身も繋がる、縁の糸をば切るに切られず。しばらくこゝに逗留し、時節を待つて旗揚げせん。積もる話も折から雪の夜、うちとけられてはたまらぬく。



写真 17 12ウ・13オ

「13ウ14オ」

つぎ助太刀して、宗任を討ち取らせ給へかし。御身が為にも忠なり義なり。宗任か首もるともに、錦木の名香を君に返し奉らば、再び

花咲く帰参の願ひ、たちどころに叶はざらんや。本望遂ぐるは今宵にあり。御身が帰参の家苞に、千代の戸を具し給はゞ、喜びこれに増す事なし。聞き入れてたべ包季殿」と、事を分けたる母親の言葉は良薬、千代の戸は身の労はりもうち忘れ、喜び気色にあらはれたり。包季聞きてうち頷き、「さては御身親子こそ、かねてその名を聞き及ぶ、藤原の時貞ぬしの妻子にてありけるよな。我が誤つて失ひし、錦木の名香の再び我が手に入る事は、千代の戸殿の賜物也。又、宗任を討ち取らんと思はれしは、將軍へこれ第一の忠節なれば、某館へ伴ふて、本領安堵を願ふべし。さりながら、我が身には別れし妻のあるなれば、縁はこゝに結びがたし」と言ふをとちめはうち消して、「本妻・側女といふ事の、世にその例なきに待らず。よしや御身は妻ありて、呼び返されなば本妻なり。わらはが娘は側女にして、一生見捨て給はらずは、それを不足にせんとにあらず。かくても望みを叶へずや」と言ふに包季小首を傾げ、「さ言はれては否みがたし。その義は某帰参の後、事の趣を聞こえ上げて、主君の御意に任すべし」と言ふに喜ぶ母娘、「さらばまづ、宗任を討ち取る手立て肝要ぞ」とひそかに示し合はすれば、包季はそのまゝ、に、もとの一間に退きけり。かくて用意整ひしかは、とちめは千代の戸を伴ひつゝ、宗任を休ませたる一間の内に赴きて、「なう宗任殿、先にもひそかに申せしごとく、我が夫藤原の時貞は、もとより官軍の味方にもあらず、又貞任ぬしに一味もせず、時の機運をはかりつゝ、なほ一城に籠りをりしに、**つぎへ**とへいと浅はかにも我々が、手立てに乗りしは運の極め。腹切らす

るはせめてもの、情けは情け仇は仇。
宗へ罪も恨みもこれまで。サア立寄つて首を打て。
藤へさすがは宗任、健気な最期。包季確かに見届けた。
ちへ父の仇、兄の敵、逃れぬ天罰思ひ知つたか。



写真 18 13ウ・14オ

「14ウ15オ」
つぎ貞任猛威を振るふの余り、無体に千代の戸を娶らんとせられしより恨みを結びて、つひに我が夫・子供らは命を一戦に失へり。しかればこれ、貞任は我が夫・子の仇なれども、かの人すでに滅びしかば、今さら誰をか仇とし恨みん。もとより御身には恨みもなし。しか

るに、この秋九月の頃、我が娘千代の戸が塩竈詣での折からに、図らずも御身を見初めて病の床に臥したるに、今宵図らずめぐり会ひ、今は包むに包み得ず。一日なりともかの人に添はせてたべと切なる願ひ、世にあるまじき事なれども、恋には親の異見も甲斐なし。命に代へんと思ひ詰めし娘を、まさしく見殺しに恋死なさんが悲しさに、今あらためてこの身の願ひ、千代の戸と婚姻の盃をして給へかし。かくの言はゞ、兄貞任が世にありし時与へぬ娘を、日陰者となり果てし宗任に妻合はするは心得がたしと疑はれん。さりながら、義家殿は我が夫の主君にはあらねども、時貞・光貞、同じ枕に討たれし時、官軍はこれを救はず見殺しにせし。義家殿、我々親子が浪々をかねて知りつ、本領安堵の御教書も給はらず。恩義に薄き大将の陰に、今さら立たんとは思はず。滅ぶるとも栄ふるとも、命を御身に任せんと、願ふ娘が心根を不憫と思ひ、此盃を取り上げて、いつまでもこゝに逗留し給へかし。かくても聞き入れ給はずや」とまことしやかに欺きて、盃を進むれば、万夫不当の宗任も、今千代の戸が花を欺く顔はせに、たちまち心迷ひつ、思はずもにつことうち笑み、「昔は敵今は又、朝敵の残党たる我と知りつ、余儀なき縁談。それ喜ぶにあらねども、一人たりとも味方に引入れ、義家を討ち滅ぼして、父兄の為に会稽の恥を清めんと思ふ某、しばらくこゝに逗留して、よりく徒党の者を集めん。まことに不思議の縁なるかな」と言ふに、とぢめはさし寄つて、「婚礼の盃は女子の方から初むる作法。千代の戸、初めて参らせ給へ」と言はれていと面映ゆげに、受くる盃飲む真似して、宗任

に進むれば、心許してなみくと引受けてぐつと干す。三々九度の式作法も、そのかたばかり納むる盃。まことに千秋万歳と、祝ひ寿く言葉のうちに、宗任たちまち面色変はつて、五体を掴む七転八倒。刀を杖に膝立て直し、「あゝ、不思議や、今此酒喉を通ると、程もなく五臓俄かに惱乱し、苦痛しきりに堪えかたきは次へ」
○善知鳥安方はその明けの朝帰り来て、事の様子を聞きあへず、千代の戸の供をして国府の城に赴かんとす。詳しくは次の頭書に見えたり。

とへ藤太郎包季の遺されし墨付きあれば、氣遣ひはあるまいと思へども、そなたが行きやればいよく安心。そんなら早う仕度をしや。

安へ包季とやらんに伴はれて、八幡殿に見参あらば、千代の戸様の御本望。さりながら、頼みがたきは人心。御一人では心もとなし。イテ追つ付いて、某も道より御供仕らん。

うへさうじやくこちの人、ちつとも早うござんせいなア。

〔15ウ〕

「つ、き」心得がたし」と言はせもあへず、とぢめはほ、と嘲笑ひ、
 「愚かや宗任、夫の仇たる貞任が弟なり。朝敵なるそちに娘を妻合は
 せんや。恋病みの門違ひ。思ふ男は他にある。それ幸ひに謀りて進め
 しは、これ毒酒と知らずや。今ぞ清むる夫の仇」「父の敵」と千代の
 戸も、用意の懐剣抜きかけて、右左より詰め寄れば、宗任怒れる眼
 を見開き、「さては千代の戸を囀として、我を討たんして謀りしか。
 宗任とも言はる、者が、女ばらの手立てに乗せられ、犬死にするか残
 念やな。我此ま、に死ぬべきか」と刀を抜けども足腰立たず、無念の
 齒嚙みもろ共に、持つたる刃を取り直し、腹へぐさと突き立つれば、
 様子を窺ふ藤太郎包季、衣服改め首桶携へ、

〔次のまきへ〕



写真 19 14ウ・15オ（早大本）

へ安方を搦め捕らせん為、南兵衛訴人して、渋谷柿平らを導き来る。
 南へちつとも気遣ひ中の間で、確かに声がしますぞへ。
 かへどうだ、かやつは内にをるかな。



写真 20 15ウ（早大本）

〔付記〕

資料の掲載を許可していただいた、東京都立中央図書館・早稲田大
 学図書館に深謝申し上げます。なお、本研究は JSPS 科研費（若手研
 究 課題番号：18K12301）における成果の一部である。

Abstract*Adachigahara-Akino-Nishikigi:*
Transliteration (Part I)

Kazunori NAKAO

This paper is a transliteration of *Adachigahara-Akino-Nishikigi*, first published in 1820, with brief commentary added. This work is based on Joruri's work *Oshu-Adachigahara* (written by Chikamatsu Hanji and others, first performed in September 1762). Both have many things in common, such as characters, era settings, and devices. Among them, in the scene where "Hitotsuya" corresponding to *Yondanme-Kiri* (the end of the fourth act), the legitimacy of the blood line is determined by using *Chiawase* (blood matching) to judge the parent-child relationship by pouring blood into the skull and *Torikaeko* (changeling) to exchange two children with different parents at an early age. *Chiawase* is Bakin's favorite device, and is also used in the anecdote of *Inumura Daikaku* in the sixth volume of *Nanso-Satomi-Hakkenden*. For details, please refer to my manuscript "Coming and going devices in *Yomihon and Gokan*: Using *Chiawase* as a clue" ("Bakin's novel style", Seibundo Publishers, 2015).

Keywords: Kyokutei Bakin (1767-1848), *Gokan* (one type of illustrated novel), drama, *Chiawase* (blood matching), *Hitotsuya* (common name for the end of the fourth act of *Oshu-Adachigahara*)